



日
二
新聞

定價
一
分

第
六
輯

西垣文庫
文庫 10
7357
3



特 文庫10
7357
3

西道文庫



○辰閏四月廿九日筑前守殿古渡以各付

德川龜之助殿今廿九日辰刻西九、以登 菅以成以換、
大經督宮、以沙汰、付、一橋大納言殿為 御名代、以
越以成以所、龜之助殿以事、以當家以相續之、以別紙之
通以仰出以所、向、早、可、以、以觸以、

壬四月

德川龜之助殿以事今日より

上様と奉称、

上様以事、

前上様と可奉称以、

右之通、以、以觸以、

壬四月廿九日

○別紙之写

慶喜伏罪之上、德川家名を続、以、美、祖宗以来之功勞を

思五格別之 督慮を以、田安龜之助に仰出の事、

但城地録高に及ぶ追ふに仰出の事

此度由緒に仰出に付、明朝日四時布衣以上、以下小役人
寺役一人ツ、服紗袷麻上下着用、田安の屋形、由出の
祝美に上、左殿中服紗袷麻上下着用、事、

壬四月廿九日

旗本の家人月代不刺抜に違ひ、交、明朝日、当地に在
る者共、一同月代刺に於ては、

壬四月

明朝日五ツ時の供揃に、高田、田安殿の屋敷より清水の
門内、田安殿の屋形へ、引移に遊に、早、向、

壬四月

日々新聞才六輯

辰五月二日出板

豆州葦山私居屋敷之儀に付、届書

嗚呼、之間敷奉、恐懼に、共、私美、鎮守府將軍左馬、權頭源

満仲二男大和守頼親より、実子相続三十八世之孫にて、

大和国奥野郡宇野に住居、頼親より、六世宇野七郎親治

保元度

新院之味方より、属し、軍不利、其後宇野太郎、豆州江川
之庄、只今之葦山へ、引移、江川に改姓仕、以来世々、浮沈有
之、慶長度、関東御八国之節、本領可為、安堵、旨に、仰出に

北条家之士に差障りしもの有之、領地先ツ代官所と
相心得、物成之十分一、下其後元録度に至、自余之
代官並より仰付に、及より右ハ往古鎌倉時代前より持
傳に屋敷郭内除地之分返上可仕式、又ハ是迄之通相心
得不苦に哉、太政官へ奉伺に、家柄之俊も有之、格別
之に憐許を以是迄之除地に預ケ置、献貢もハ不及段
に仰渡、今以代官所身分ホ之に沙汰ハ無に坐、謹慎在
京仕に、及より座に依之、此段に届申上、以上

辰四月

江川太郎左衛門

○閏四月十九日上方金相場

一 京都

金

八拾匁四分

一 大坂

金

二百七匁五分

一 大坂

金二朱二付

錢一貫五百拾二文

但し錢ハ追々下落のよし、右の如く京
坂の金相場格外の相遠有之趣あり

○
閏四月廿二日江戸の船行速丸ハ先おろ総房ニ居り
し脱走人鎮撫として榎本和泉守開陽鑑ニ乗りて房州
館山ニ破泊し居るをハ此船ニ用向りて早朝出帆せ
り

○
先頃総房鎮撫として柳原殿ニ出張有りし処鎮靜い
しとるよりて當月廿二日房州より徳川氏の運送船
長鯨丸ニ乗りて飯府いさされ濱海軍所へ上陸して
同西庭中嶋の茶屋にて暫時西休息有り御濱見附り

勢揃いとし真先ハ先鋒隊と記し旗を押し立次ニ
礮隊とい小旗を立大砲四挺を引き又其次ニ撒兵隊と
記るせし旗を押し立凡二小隊程戎装にて太鼓を打ち
後ニ菊の御紋付きたる旗二派を押し立又菊の御紋
の小旗を立此本ニ柳原殿ハ装束の上ニ陣羽織を着し
陣笠を被らも徒行りて其周圍ニ凡五六十人ほど嚴重
ニ囲み其後ニ赤地ニ白き菊の紋の大旗を流し前後凡
三百人余り物正々行列して同日七ツ時頃西城へ入
せられり

閏四月十九日野州藤原山日光近在栗口脱走兵大鳥
 圭介隊と會津藩山川大内蔵隊と一ツはふり官軍方土
 州彦根兩勢は打向ひ大戦は及ひたる所北方勢脱走兵
會津兵は十分勝利を遂ぐる由同廿一日より廿二日よりけ
 北方勢追く今市辺より押出し又と戦ひて勝利を得と
 り但し此戦は十九日の如く十分なる勝は無之由
 右ハ一士人日光より江戸へ来る途中をたしうに
 見聞しつりし事

先頃長州族ハ 行幸の供奉を以て大坂より行りし事なるが

何故あるや當月八日 還幸の折其終大坂に滞留して
 上京せり剩り議定職御免之笑を内願し當月初旬願の
 通被仰付し国元へ取らる由
 或曰く長州の進退動靜感すべく又おとるべしと

閏四月廿一日東海道藤沢宿大久保町旅籠屋清四郎の
 家より本光院宮家来石川攝津之助石川民部毛利丹波医
 師芳庵し名乗りしもの止宿したる処同夜池田信濃
 守家来水田謙吾渡部太郎外拾五人同処より来り豊本
 といへる茶屋へつき翌廿二日朝右攝津之助もとり残

りく百捕とるよ

○ 同廿三日、武州荏原郡桐ヶ谷村、百姓家へ戎装の武士五人、白昼に押入り、金子差出すべく、不承知いとし、可切殺と強談子及びひとる也へ百姓とも竹槍を以て、打向ひ一人突首とれハ、其余の四人ハ逃去り、右の死骸ハ荏原川へ投込たる由、

○ 同四月廿二日、夜駿河臺岸本金八どいつるもの家へ、盜賊二十人程押入り、金八を切害し、刀ハ腰、股指ハ九本

金四十兩其外衣類亦奪取逃去とる由

述懐

読人志らく

生うまり死かきり来ていくとひも身を尽しぢん君の
みと先り
二荒山神も何とせと
すなつろ
天神よとむくもよ
或ハ日川路頑民奇悲憂憤悶の何まり自及して世

を弁られし此歌ハその六七日前つくし讀置也
こりど。時ハ齒七十^ハ今茲三月五日の事ある
よし。がよ老人^をも似があき勇ま^しも又憐ともい
ふへり也

義邦^{トクノ}ぬしの奉書^{カクシ}を^ニ侍^スりて 重和

花よりも^もかぬく^くた^た大君^{オホノミ}と君との中^{ナカ}よつく^くり
言^{コト}の丸